

東京大学多文化共生・統合人間学プログラム × トヨタ財団

The Ways to Have a Better Dialogue for Empathy

Mutual Learning and Exchanges

学びあいから共感へ

～私たちはいかに社会と対話してきたか

実施報告書

2020年4月



The University of Tokyo

東京大学多文化共生・統合人間学プログラム (IHS)



THE TOYOTA FOUNDATION

公益財団法人トヨタ財団

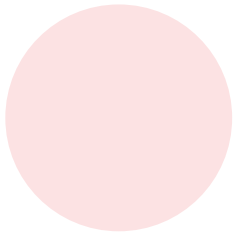
はじめに

このブックレットは、2020年2月7日、8日の2日間にわたって開催された、東京大学多文化共生・統合人間学プログラム(IHS)とトヨタ財団の共催シンポジウムの実施内容を紹介するものです。

グローバル化の進む現代において、国や文化やセクターの枠を超えた対話と協働は、複雑な社会課題を解決する上で欠かすことのできないアプローチとなっています。本シンポジウムでは、国やセクターの境界・領域を超えて、社会課題に向き合い、社会を動かすことに取り組んできたトヨタ財団助成対象プロジェクトの担い手と、専門性を備えたうえで、領域を横断した学びと社会での実践をめざす東京大学IHSの研究者・学生が集い、「社会との対話」に焦点を充て、プロジェクト運営、社会課題への関心を喚起する様々な手法やその成果・課題を共有しました。

ここでは、その場に参加したIHSの学生の視点―“Report from the IHS”を交えて、2日間にわたるセッションの要点を紹介しています。トヨタ財団助成対象者とIHS関係者の対話、そしてそこから得られた学生たちの知見が、研究と実践の統合がもたらす可能性への示唆につながれば幸いです。





はじめに p.02

主催者紹介 p.04

プログラム p.06

Session1

映像作品上映会&クロストーク：“彼ら”の見方・切り取り方 p.08

Session2

国際シンポジウム：境界の超え方・つなぎ方 p.12

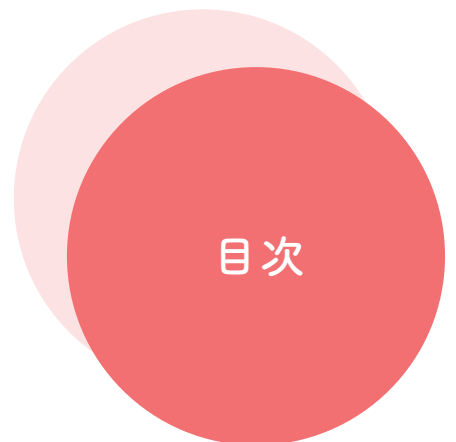
Session3

ワークショップ(非公開) p.17

おわりに

園田茂人(東京大学教授、トヨタ財団国際助成プログラム選考委員長) p.22

目次



トヨタ財団について

トヨタ財団は、トヨタ自動車によって1974年に設立された助成財団です。世界的な視野に立ち、長期的かつ幅広く社会活動に寄与するため、生活・自然環境、社会福祉、教育文化などの領域にわたって時代のニーズに対応した課題をとりあげ、その研究ならびに事業に対して助成を行っています。国際助成プログラムに加え、研究助成プログラム、国内助成プログラムの3プログラムが助成事業の主たる柱となっています。

トヨタ財団国際助成プログラムについて

トヨタ財団国際助成プログラムでは、2013年から「アジアの共通課題」をテーマに掲げています。当初、高齢化、人の移動、そして再生可能エネルギーという3分野に対する研究と活動への助成を行うなかで、地域コミュニティにおける諸課題を理解するためには文化的な側面の理解も不可欠であるという認識を得ました。また、国境やセクターを超えた相互交流と学びあいというアプローチは、さまざまな「アジアの共通課題」に対する取り組みに対して有用であるという考えのもと、段階的にプログラムの見直しを行っています。

その結果、現在の国際助成プログラムは、東・東南アジアの複数国かつマルチセクターからなるチームが、相互の直接交流を通じてアジア共通の社会課題に取り組み、その成果を社会に発信することを支援しています。領域を超えて、プロジェクトのスキームを重視し、相互交流と学びあいを通して、プロジェクトメンバーや対象となった地域にポジティブな変化を生み出すことを目的とするプログラムとなっています。

現在、そして将来の世界の課題は要素が複雑に絡み合っており、解決へ向けたヒントを見つけ出すには、さまざまな主体による協働・共創が必要です。本助成プログラムが、互いの隣国である東アジアと東南アジアのリーダーたちを有機的に結びつけ、所期の目的が達成されることを願っています。

東京大学大学院 博士課程教育リーディングプログラム 多文化共生・統合人間学プログラム (IHSプログラム) について

2014年に開始した本プログラムは、文部科学省からの助成のもと、大学院における教育の新たな方向性を示す革新的プログラムです。50人程度の学生が所属し、本プログラムを主専攻とする学生と、本プログラムを副専攻として、本来の専門分野と両立している学生とがいます。

その理念を示すキーワードのひとつが「統合」です。これは、蝸壺化した学問分野について、それらを横断した学びを目指すことを意味しています。プログラムでは、講義を通して、分野ごとの方法論やマインドセットを学びます。多分野にわたるリテラシーを身につけ、自分の専門分野ではない分野での最新の研究の意義や可能性を理解できるようになることが狙いです。

もうひとつのキーワードが「共生」です。「文化の多様性」と言わずに「共生」を用いるのは、多様な個々人が心地よく過ごすだけでなく、互いに尊重され大切にされることにまで心を配ろうとしたことです。

アカデミアと社会とのあいだにある境界を越え、学外でのさまざまな研修を通して、学生たちは行動力と企画力を習得します。

IHSプログラムのこれからの課題は、多分野横断的交流の成果を、実社会へと還元する方策を探ることです。この課題に取り組むために、学生たちは、過疎化が進む地域での「謎解き」の企画・リサーチや、学問のアウトリーチを目指した学外でのイベント開催、さらに町に根ざした研究活動の実践を行ってきました(p.18-19参照)。多文化共生に取り組む際の成果とはなにか、関係性の深まりなどの「質」は成果として可視化できるのか、どんな成果を数字で示し、何を数字に片付けてはいけないのか、イベントや集まりをその場限りにならないためにはどうすればいいのか…そういった課題に取り組むべく、学生ひとりひとりが試行錯誤し、工夫をこらして活動しています。

The Ways to Have a Better Dialogue for Empathy

Mutual Learning and Exchanges

学びあいから共感へ

～私たちはいかに社会と対話してきたか

日時：2020年2月7日(金) 15:00-18:00

2月8日(土) 10:00-12:30、14:00-16:30(非公開)

会場：東京大学駒場キャンパス 18号館ホール、コラボレーションルーム3



プログラム

2月7日(金)

Session1 映像作品上映会&クロストーク：“彼ら”の見方・切り取り方

15:00 開会挨拶 高橋 哲哉 東京大学大学院総合文化研究科・副研究科長

15:05 トヨタ財団国際助成プログラムについて 利根 英夫 トヨタ財団プログラムオフィサー

15:20 作品上映&プレゼンテーション

「結婚移民女性の自尊感情を取り戻す—視覚表現を通して」

J・ユヒョン・イ 香港理工大学博士課程

「多民族化の日本を捉える—共生を学ぶ留学生と日本人」

ディペシュ・カレル 映像作家、東京大学研究員

「『彼ら』を知るために『私たち』を理解する」

スイヒン・クリー Women Peace Makers エグゼクティブディレクター

17:05 クロストーク コーディネーター 利根 英夫

18:00 終了

Session2 国際シンポジウム：境界の超え方・つなぎ方

- 10:00 開会挨拶 山本 晃宏 トヨタ財団常務理事
- 10:05 趣旨説明 園田 茂人 東京大学東洋文化研究所教授、国際助成プログラム選考委員長
- 10:15 プロジェクト紹介

「IHSの取り組み」

高橋 英海 東京大学大学院総合文化研究科教授

田邊 裕子・飯塚 陽美 東京大学IHSプログラム

「宗教、ジェンダー、世代の調和による和平—タイ深南部とインドネシア・アチェ州の事例」

ナピサー・ワイトウンキアット ナレースワン大学大学院ASEAN共同体研究科長

「多文化な若者達へのアートを通じた人材育成プロジェクト」

海老原 周子 一般社団法人kuriya代表理事

「カンボジア王国サンボークレイクック遺跡群と沖縄県南城市におけるコミュニティ・ベースド・ツーリズムの確立に向けた学び合い」

吉川 舞 ナプラワークス代表

- 11:45 パネルディスカッション コーディネーター 園田茂人
- 12:30 終了

Session3 ワークショップ(非公開)

- 14:00 趣旨説明
- 14:15 企画者の学生からの活動報告とゲストへのインタビュー
- 15:30 グループ・ディスカッション
- 16:10 全体共有

Session1 映像作品上映会 & クロストーク “彼ら” の見方・切り取り方

映像は社会への発信に有効な表現ツールの一つです。ここ数年の国際助成プログラムでは、複数のプロジェクトにおいて、成果物として映像作品が制作されてきました。セッション1では、3組がプレゼンテーションを交えて作品を上映し、その背景や狙い、映像媒体の活用の方法について、クロストークを行いました。

登壇者紹介



チョウ・ユンジュ (Yun) & J・ユヒョン・イ (Jen)

2016年にタイで出会い社会的アート活動への関心で意気投合し、国を超えた共同プロジェクトを展開。Jenはコミュニティアートの実践者で、ソーシャルデザインのPh.D.を取得中。Yunは台湾のアーツカウンシルに所属しアートイベントを企画している。

※直前の変更により、Jenのみが来日、登壇した。

助成プロジェクト概要

結婚移民女性の自尊感情を取り戻す—視覚表現を通して(対象地:台湾、韓国)

韓国および台湾は、両国とも20世紀後半の経済成長の副次的影響である結婚移民の増加に直面しているという共通点がある。その多くは、国際結婚機関を通じて中国と東南アジアからきた女性である。余所者とされ、結婚後の親族関係や社会のなかで無視され、劣った存在として非人間的な扱いを受けてきたため、彼女たちの自尊感情は低い。子どもたちの多くは、父親の名をとって名付けられ、父親と同じ言語を話し、母親の文化・伝統を尊重しないだけでなく、教育レベルが低い傾向がある。これを人権問題としてとらえ、アートを通して結婚移民女性と子どもたちが自らのストーリーを社会に向けて語り、自尊感情を養うことを目指した。

プロジェクトの展開につれ、参加者すべてにとって関係構築の重要性が明らかになった。女性と子どもたちは互いに話し、他の参加者、地元のボランティアと物語を共有して一種の新しいコミュニティを形成した。このプロセスとそれに伴う社会的ポジションの変化は、他の移民向けプログラムやアートワークショップには見られないユニークな成果となった。



ディペシュ・カレル

映像人類学者・映像作家。フィールドワークを基に数多くの執筆や映像制作を手がける。2018年東大総長賞受賞。上智大学の日本学術振興会特別研究員、および東京大学の研究員として、東南アジアから日本への移民や留学生を映像に記録する活動を行う。

助成プロジェクト概要

多民族化の日本を捉えるー共生を学ぶ留学生と日本人 (対象地: ネパール、ベトナム、日本)

近年ベトナムやネパールから日本への留学生は急増し、2016年にはそれぞれ第二位、第三位の留学生コミュニティとなった。これらの留学移民は急速に進む日本の少子高齢化社会における貴重な労働力である。疑いなく若い移民達と日本人住民は、同じ町で暮らし包摂的な社会を作っていく中で、様々な挑戦と機会とを共有している。

この民族誌映像プロジェクトの主な目的は、こうした「共生」の経験を記録し、そこで得られた知識を世界へと広めることにある。ベトナムとネパールから日本への留学生としての移住の原因、過程、及び社会的結果についての相互理解を獲得することは、日本、ベトナム、ネパール、さらにその他の国々における、国際移住についての包括的な政策形成にも役立つだろう。



スィヒン・クリー

Women Peace Makers Organization (WPM) エグゼクティブディレクター。2003年の設立以来、対話や理解促進、戦略的介入による女性と若者のエンパワーメント、紛争変容、暴力の防止のために活動している。マサチューセッツ州ローウェル大学紛争平和学修士、王立ブノンベン大学教育学士。

助成プロジェクト概要

「彼ら」を知るために「私たち」を理解するーファシリテティブ・リスニング・デザインを用いた地域レベルでの共感の醸成 (対象地: カンボジア、タイ、ベトナム)

このプロジェクトでは、WPMが開発したコミュニティ活動アプローチを用いて情報収集、相互理解の深化、共感の醸成を行っている。カンボジア国外に住むマイノリティとしてのクメール族の参加者は、ファシリテティブ・リスニング・デザイン (FLD) の手法を用いて、彼らのコミュニティ内での意見や感じていることをまとめ、彼らの強みや弱みに関する新たな認識を得る。カンボジア人の参加者もまた、自国内のマイノリティに焦点を当ててFLDを用いることで、2つの異なるマイノリティ・グループの分析と比較のための一連のデータが得られる。グループとしての「クメール族」あるいは「カンボジア人」の一貫性から、カンボジア国内の「その他の」民族が、ベトナムやタイでマイノリティ・グループとして生活しているクメール族と同じように考え、感じていることもわかってくる。プロジェクトの最終目標は、マイノリティ・グループとしての「私たち」を理解することで、他のマイノリティ・グループの経験を認識することである。

Report from the IHS

撮影を媒介に生まれた、それぞれの気づき ● ジェン・ユヒョン・イ

映像媒体を用いることのメリットは、撮影も鑑賞も、人々にとって身近なものだという点にある。カメラを持つことによって母親と子どもたちは活発にコミュニケーションを取るようになったという。

イさんは、企画者とアーティスト両者の立場から、台湾と韓国の2ヶ国で、アートワークショップを行った。対象は移住者としての母と、その子どもたちだ。当初、韓国と台湾で同じプログラムでやっていこうと計画していたが、実際には、韓国でアート制作、台湾でビデオ撮影のワークショップをやることになった。異なるプログラムを同時期に行ったことで、両者をビデオ通話でつないで相互に成果発表を行い、参加者同士が対話をする機会を設けることができた。

アートセラピーによって子どもたちが心を開いてくれ、母親たちも少しずつ胸の内を話してくれるようになった。上映作品のなかでは、ある母親が、母と子の関係について新たな気づきが生まれたり、ひとりの人間として学びを得られたと話していたが、イさん自身は、多くを学んだのは、企画者の自分たちの方だと考えており、感謝を述べて報告を結んだ。

今後の課題として、多様な生活状態の親子を迎え入れられるように動線を引くことが挙げられた。今回の参加者たちは、ある程度安定した暮らしをしている母親が多く、もともと想定していた、厳しい生活状況の母親たちに合致した枠組みではなかった。母親だけでなく、子どもと一緒にエンパワメントできるような態勢を、これからも目指していくそうだ。

語りと対話を拓くための映像とは ● スイヒン・クリー

発信媒体としてのリーチの広さも映像の魅力といえる。注目されにくい問題について、負担の少ない形で、しかも深く知ってもらうためには、映像作品こそが有効だという実感を、登壇者たちはそれぞれのエピソードを交えつつ、繰り返し強調していた。

スイヒン・クリーさんは、女性と若者のエンパワメントに従事し、紛争や暴力の防止のために、対話を通じた理解の促進を行っている。今回のプロジェクトでは、カンボジアの少数民族について、異文化理解のために独自にデザインした活動ステップ、「傾聴→記録→共同分析」を実践した。当事者自身が撮影機器を用いて記録することによって、個々人に焦点を当てたライフストーリーを汲み取ることができ、彼ら自身にとっても所属するコミュニティとのつながりを確認できる道具になったという。

映像作品は、個人の語りの世界に時間をかけて入り込んでいくスタイルで編集した。今の仕事はどんなものか、何語をどれくらい使っているか、家族はいるか、自分の民族の伝統文化についてどう感じているか、これまでどんな苦勞をしてきたか、昔と今はどれくらい違うか…ひとりひとりの声や語りのリズム、佇まいを見ていると、自然と愛着が湧いてきて、他人事には思えなくなる。

作品の上映活動も積極的に行い、対話の場も開いてきた。マイノリティの生活苦や社会問題について、知識がなかった人々へ作品を届けられたことは有意義だったという。「私は誰、あなたは誰、そして私達は誰なのか」を問い直し、異なる人々との共通点の多さに驚き、同じ人間として共に歩んでいくという感覚の種を蒔いていきたいとクリーさんは語った。

当事者の視点を可視化する ● ディペシュ・カレル

映像制作の敷居の低さとアウトリーチの広さによって、どんな人も主体的に加わって参加することができる。映像という媒体は、登壇者たちの活動理念と相性が良かったようだ。ディペシュ・カレルさんは以下のように語った。

いまだに移民と社会との間に大きな乖離があり、多くの日本人は移住者の厳しい生活を知らない。では、マジョリティが彼らをエンパワーメントしようという解決方法が適切かという、そうではない。共に学びあい、話し合うことができるようなコミュニティを作っていくべきだ。その橋渡しをするのが私たちの役割なのではないか。

カレルさんは映像人類学者として、フィールドワークを軸に、数多くの記事や映像を発信してきた。このプロジェクトでは、日本におけるアジアからの移民や留学生について、当事者自身が制作に関わり、映像に記録する活動を行った。上映作品は、若者たちの生活環境の実態を紹介するもので、狭い部屋を寝室として共有したり、もんじゃ焼きのお店やコンビニエンスストアなどでのアルバイトの様子を撮影した。学費だけでなく母国への送金のためにも働いていること、怪我をした状態でも休む余裕はないこと、ピザの申請がなかなか通らないこと、帰国しても留まっても先行きが見えないことには変わらないこと…映像からは、留学生が抱える大きな負担と苦勞が窺え、疲労感と未来へのかすかな希望とが胸の内に渦巻いているのが、彼らの語りから垣間見えた。支援の現場として名古屋の徳林寺にも取材をした。このお寺は、境内にベトナム寺院を建設し、若くして命を落とした留学生たちのために、葬儀をとりおこなってきた。彼らの死因は自殺、交通事故、原因不明など様々だ。留学生の生活支援も行っており、境内でお祭りを催すときには、ベトナム人留学生による屋台を出している。カレルさんは、各地でヴィジュアル・エスノグラフィック・フィールドワークを行うだけでなく、撮影のワークショップも開催してきた。留学生同士がインタビューしあうことで、彼ら独自の視点を可視化することを意識しているからだ。ベトナムとネパールからの留学生が急増している背景をふまえ、これからも、多民族化する日本社会の実態を発信していきたいと考えている。

プロセスとしての映像作品とコミュニケーション

最後に、コーディネーターから協働の関係を築くための工夫を問われると、時間をかけてコミュニケーションを取ることの重要性が、それぞれのエピソードとともに挙げられた。

クリーさんは、すぐにドキュメンタリーの撮影には入らずに、個人的な信頼関係の構築に一年半以上をかけたと話した。そこからさらに個人のライフヒストリーを話してもらえるようになるまで、六ヶ月がかかったという。映像作品の完成後は、まず本人に確認してもらってから公開するようにし、上映会では必ず対話の場を設けている。

完成物としての映像作品そのものよりも、映像の制作と上映をプロセスとしてとらえ、様々な段階において、各プロジェクトの目的にあった企画を用意する。この柔軟な企画力の大切さが、繰り返し浮かび上がるクロストークとなった。

Session2 国際シンポジウム：境界の超え方・つなぎ方

セッション2は、東京大学大学院IHSプログラムの設計者の一人で、トヨタ財団国際助成プログラム選考委員長も務める、園田茂人先生からの前日の総括と問題提起から始まりました。IHSプログラムのコーディネーターである高橋英海先生と所属学生2名からIHSプログラムについて紹介が行われ、続いてトヨタ財団国際助成プログラムの助成対象者3名が登壇しました。

登壇者紹介



園田茂人

東京大学東洋文化研究所教授、トヨタ財団国際助成プログラム選考委員長。専門は中国社会学論、比較社会学、アジア文化変容論。



高橋 英海

東京大学大学院総合文化研究科教授、多文化共生・統合人間学プログラム(IHS)コーディネーター。フランクフルト大学博士課程修了(東洋学)。専門はシリア語および中世アラビア語文学・文献学。

田邊裕子 (IHS博士2年)、飯塚陽美 (IHS修士1年)



海老原周子

一般社団法人 kuriya 代表理事。文部科学省 日本語指導アドバイザー。ペルー、イギリス、日本で育つ。(独)国際交流基金、国際移住機関(IOM)等で勤務。2009年より、移民の高校生を対象にキャリア教育やアートプロジェクトなどを行う。2016年EU主催「Global Cultural Leadership Programme」日本代表。

助成プロジェクト概要

多文化な若者達へのアートを通じた人材育成プロジェクト—アジア間の国際プラットフォーム形成(対象地:日本、香港、マレーシア)

本プロジェクトは、多文化な人材形成の基盤づくりを目的とした国際連携共同プロジェクトである。多様な文化背景を持つ若者を、支援の対象としてではなく、今後の国際社会の次世代の社会をつくる担い手として捉え、若者を育成するネットワーク連携とプログラムの協働開発を目的とした。東京、香港、ペナンの3都市で、アートを通じたエンパワメントプログラムを実践しているアーティストやNPOが、各国のプロジェクトサイトを訪問し、お互いの取り組みや課題について情報共有した。国際的なネットワークを形成することにより、他国のメンバーの持つ知見と課題の共有が可能となり、それぞれの課題解決の糸口になった。また共通の課題に対して多様性を発見するワークショップなどのプログラム開発を行った。



吉川舞

ナブラワークス代表。カンボジアの世界遺産サンボークック遺跡群を舞台に、古代と現代と未来がつながる旅を提供。訪れる人、迎える人の双方に価値ある旅を地域の仲間とともにデザインしながら、遺跡と自然、人々のつながりが織りなす遺跡生態系を育てている。

助成プロジェクト概要

カンボジア王国サンボークック遺跡群と沖縄県南城市におけるコミュニティ・ベースド・ツーリズムの確立に向けた学び合い(対象地:カンボジア、日本)

助成期間中の2017年に世界遺産に登録されたサンボークック遺跡群周辺地域と、世界遺産・斎場御嶽のある沖縄県南城市の地域メンバーを中心とし、地域における観光、暮らし方、地域の未来について、共通する課題や今後の展望をともに考え、学ぶ機会を創出した。

世界遺産という正負を問わず大きなインパクトを有する観光資源に依存することなく、その土地の暮らしに根差した価値ある時間や経験を地域の中でできる規模で提供する、コミュニティ・ベースド・ツーリズムという観光の形を切り口に、日本・カンボジア・イタリアの事例を訪問した。当該地域で実際に観光をつくるプレイヤーたちとともに、訪れる人たちの細やかな関係性を築くことで、より大きな社会的・経済的利益を地域の中で生み出すための実践について現場レベルの学び合いを実現し、一過性ではないラーニングパートナーとしての関係の端緒を築いた。



ナピサー・ワイトゥンキアット

タイ・ピサヌローク州ナレースワン大学社会科学部学部長兼ASEAN共同体研究科科长。Asian Political and International Studies Association前会長・現事務局長。研究領域は党/選挙政治、民主化、平和学、人間の安全保障、東南アジアの移住等。

助成プロジェクト概要

多様性を通じた平和構築を目指して—タイ最南部の課題とインドネシア・アチェ州の教訓(対象地:タイ、インドネシア)

紛争中のタイ深南部と平和を達成し平和の維持と発展を目指すインドネシアのアチェ州が相互に学び合い、ジェンダーや文化的相違から生じる問題、世代間によるジレンマ等の情報収集を行った。私たちが学んだことは、平和構築には住民をはじめ軍、行政、市民団体、メディアなどすべての関係者の協力、平和教育、多様な文化の共生、世代間交流が促進されなければならないということだ。解決策を見つける取り組みの中で、タイ深南部以外の州でフォーラムとシンポジウムを開催し、情報を普及し、人々の間でこの問題についての意識を高めるように努めた。市民社会組織(CSO)メンバー向けにデータ分析とコミュニケーションのスキルを強化する研修も開催し、平和維持への貢献の継続を目指している。

「境界」と「分断」～本セッションの問題提起

デュルケムの「機械的連帯から有機的連帯へ」といったテーゼを取り上げ、同質的な成員から成る社会から異質な成員が分業によって結びつけられる社会への変化が進化だとする考え方を問題にした。

確かに異質な成員が有機的に結びつけばよいが、実際に、本当に有機的な分業がなされているかという点、そうになっていない。特に専門的なテーマで博士号の取得を目指す大学院にあって、焦点を絞って深掘することばかりが重視され、関心を共有し協力することが促進されているとは言い難いのが現状だ。その結果、他の分野や実社会、大学との分断がどんどん進んでいるのではないかと、このように思う。

こうした危機感から構想されたIHSプログラムは、アカデミアと実社会のあいだの溝を埋める人材の育成を目指している。IHSプログラムが注目するポイントである洞察力、創造力、協働力、統合力は、トヨタ財団の国際助成プログラムが注目する国際性、越境性、双方向性、先見性と、深く通じるところがあるのではないかと。そうした関連性も念頭に、トークセッションは「境界」をテーマに展開した。

共感で魅力を掘り起こす ● 吉川舞

熱心に企画しても、「そんなことやってどうなるんだ」と言われてしまうとき、それをどうやって乗り越えるか。吉川さんは、自身の妊娠と出産の経験が、実験的プロジェクトを遂行するときの感覚と似ていたという。成果の形さえわからないなかで、いかにチャレンジしていくか。仲間を増やすためには、実直に膝を詰めて話を続けることが一番、それはまるで「冷え性の人の手をずっと握り続けるようなものだ」という。

吉川さんは、コミュニティ・ベースド・ツーリズムに携わり、「地域のちからになる観光」と捉えて活動している。助成プロジェクトでは南城市とサンポープレイクックという2つの地域をお互いに訪問し、交流を通して観光のありかたを再考した。これらの地域の共通項は、世界遺産と地域の暮らしが近いこと、遺産の範囲が大きく全体を捉えづらいたことが挙げられる。目に見える建築物などよりも、過去の営みを想像力で補うような遺産だ。

世界遺産がある地域では、地域住民と遺産との密接な関わりが観光地化が進むにつれて弱まる傾向がある。遺産と地域住民が離れてしまうと、遺産を訪れる観光客も結果的に減っていくという悪循環があるため、地域コミュニティ、遺産、観光客の三者の関係維持が、観光業の課題なのである。街全体や、暮らしている人々まで含めてこそ世界遺産なのだという態度で、訪れた人の価値観が揺さぶられるような旅のありかたを模索している。

プロジェクトでは、一般のお宅の台所に入れてもらい、家庭料理をいただいたり、地域の人に地域を案内してもらったりと、シンプルだが人間味のある交流の機会を多く設けた。そうすると、表面的な魅力だけでなく、リアルな課題についても自然と話題が及んだ。良いところを見るだけでは、人間の心は動かない。人は、課題意識において共感する。観光におけるサステナビリティを考えると、まず地域の日常のサステナビリティを考えることが大切だということが取り組みの中で見えてきた。観光地化を計画するとき、その地域に足りないものを外部から補填することが多いが、それでは、解決にならない。まだ見えないままになっている地域の魅力こそが重要で、それに気づくための時間をたっぷり取る必要がある。プロジェクトでは、異なる地域の人々がお互いから学びあうことで、こうした気づきを生むことができた。参加者全員が自然体で満面の笑顔を浮かべ踊っている写真をスクリーンに映し、情熱的にプレゼンを行っている吉川さんの姿が印象的だった。

立場を越えるための「翻訳力」 ● 海老原周子

境界をどのように乗り越えたのかという問いかけについて、そのための力として、「翻訳力」が挙げられた。これは、言語間の翻訳のことではなく、立場の違いを踏まえたコミュニケーション能力のことである。一般社団法人kuriya代表理事として、海老原さんは「多文化な若者たちへのアートを通じた人材育成プロジェクト」を行っている。多文化な若者の現状を、課題ではなくポテンシャルとして捉え、香港、ペナン、東京の3都市で活動してきた。

現場での企画実行と並行して、政策提言も行った。それまで、現場での活動はいつも葛藤を抱えたものだった。なぜなら、若者を取り巻く環境の深刻さを突きつけられながらも、具体的な支援体制を持たない無力感を抱いていたからだ。移住した若者たちは、学校を中退したり、進学したくてもできなったり、虐待などの暴力にさらされる日常を送っていたりする。アートプログラムの限界を感じ、外国ルーツの高校生を支える仕組みが不足していることについて、政策提言をすることに決めた。現場で聞いた声を政策提言の形で行政に届ける際に必要になったのが「翻訳力」だったという。実態調査の不足を補うなど、成果を生むことができた。

相手の立場になることで、受け止められ方を意識でき、用いる言葉に工夫が生まれる。この海老原さんの発言に対して、IHSの田邊さんは、論理のレベルにおいても「翻訳力」が必要になるのではないかと展開した。立場が異なると、論理が変わる。IHSプログラムにあっては、教員と学生の立場の違いが挙げられる。両者の違いが顕在化した場合、事務局のように、両方の論理とすれ違いが見えるポジションが調整役を担うことになる。調整役の立場との密なコミュニケーションが、IHSにおける論理の翻訳を可能にしてきたと語った。高橋さんからは、マジョリティがマイノリティの姿をそもそも捉えられないことが問題であるように、教員からも学生の実態が見えにくいことが課題になっているという指摘があった。

干渉を越え、関心呼び起こすには ● ナピサー・ワイトゥンキアット

どんな境界が一番の難関だったかとの問いかけに対して、ナピサーさんの答えは、「軍による干渉」というものだった。タイ深南部では、衝突・暴力・死が現在進行形で進んでいる。この地域では、77%がイスラム教徒で多数派であるが、タイ全体においてイスラム教徒は少数派であることを踏まえると、特異な点である。2020年までに7000人以上の人の命が犠牲になるジェノサイドの現場であり、状況は極めて深刻である。宗教別に死傷者のデータを見みると、死亡者はムスリムに偏っている。性別では男性が8割、年齢別では18-59歳の人たちが70%。年齢不明が20%もいるが、これは遺体から人物が特定できなかったことと合わせて考えるべき数字である。さらに、孤児は1万人にのぼる。

彼らは平和に生きる権利を持っているはずである。紛争地域に住んでいる人たちが不安感でいっぱいの日々をおくる一方で、軍事予算は膨らみ続けてきた。ところが、タイの大学生にこの問題について聞いても、「知らない」という者がほとんどで、非紛争地域にいと問題を「遠く感じる」し、「よそのこと」だと感じがちである。違う地域のことを自分ごととして関心を持つことができるよう、現在の紛争地域と紛争の収まった地域の両方を対象に、三都市でフォーラムやフィールドワークを行った。市民団体の支援体制の強化と、国民の意識の向上に、覚悟を持って取り組んでいる。

なぜ私たちは境界を越えようとするのか？

トークセッションの結びとして、境界を越えようとしたとき留意したこと、そしてプロジェクトを遂行する個人的動機について、登壇者ひとりひとりがコメントした。海老原さんは、様々な立場の人が集まるために、精神的に安心・安全な場所を作ることが重要だと述べた。そうした態度で活動を続ける動機は、海老原さん自身が、マイノリティとして生活してきた経験にある。吉川さんが大切にしているのは、共に飯を食い、同じ時間を過ごすこと。地域に暮らしてきた人々が、彼ら自身のなかに可能性を秘めていることに惚れてしまったことが、一番のモチベーションだという。ナピサーさんは、タイ深南部に平和があったときの記憶を持っている。仏教の僧侶とイスラム教徒が日常的に思いやりを持って交流していた、その風景を心に抱いて活動している。現状を改善するためには、NPOと対象地域、そして軍が良い関係を築けるように対話を重ねる必要がある。平和とは政治の問題である、とナピサーさんは語った。

たくさんの苦労と課題が交錯する現場で、取り組むべき課題をみつけて光をあてること。海老原さんと吉川さん、ナピサーさんに共通するのは、焦点をあてるべき重要なポイントを見つけ出す洞察力だろう。それは、研究者の営み、すなわち論文を通して論点を整理し考察を深めるという活動とも通じるものである。実践か研究か、二項を対立させるのではなく、そのふたつを往来するためのヒントが見つかりそうなトークセッションであった。



Session3 クローズド・ワークショップ

IHSの学生によって企画されたセッション3は、学生とトヨタ財団の助成を受けたゲストたちが、より密に言葉をかわし、交流する機会となった。学生たちはそれぞれのアイディアで、分野横断的な取り組みの積み重ねをどのように社会へ還元するかという課題について取り組んできた。3組の学生がそれぞれのプロジェクトの報告を行い、そこから浮かび上がったキーワードに従って、後半は小さなグループに分かれて議論を深めた。

本セッションのコンセプト

研究と実践の関係は、理論と応用という直接的で一方向的な関係に収められるものばかりではない。むしろ、研究活動を通して特定の 이슈を深めれば深めるほど、どんな実践も問題とリスクを孕んでいることが明らかになる。草の根的なエンパワーメントが必要な一方で、深淵に浮かび上がる問題から目を背けていいわけではない。具体的な個人を見ながら社会全体を思い浮かべ、社会全体を見ながら個人を思い浮かべること。「木を見て森を見ず」ということわざがあるが、研究と実践の両立とは、木と森とに交互に焦点を移し続けることだと言える。

IHSプログラムは「グローバル化社会における多元的共生の諸課題を解決するための学知」を身につけさせることを教育目標として掲げている。学生は、専門性と幅広い教養の両方を活かすトレーニングを行っており、専門分野における論文執筆だけでなく、学内での分野横断的講義や、学外での研修に参加している。さらに、企画段階から全て自分たちで進める「自主企画」の機会も与えられており、研究と実践の両立を主体的に模索している。本セッションでプレゼンを行ったIHSの学生3組も、それぞれに、木と森のあいだで往来する方法を試みている。



IHSの取り組みから

「河内ナゾトキ町探検」～宮崎県西臼杵郡高千穂町における謎解きイベント

最初に報告をした田邊と中川は、地域コミュニティにおける「語り」に関心を持っている。このイベントは、NPO法人田原未来プロジェクトと共に、2019年の秋に開催した、地域活性化イベントである。過疎化が進む地域において、町の歴史を題材に「謎解き」をしながら散策をする。地域の方々と協働するなかで、リサーチ、リハーサル、本番を通して、様々な記憶を喚起し、暮らしに根ざした語りを聴くことができた。

報告を受け、フロアから主に2点の指摘があった。1)対象地域(高千穂町河内)のニーズとイベント内容との関連、2)IHS学生が当該イベントに参加した際の立場と関心のありかについてである。参加学生の専門分野は地域振興や行政学とは直接関係がなく、企画・運営段階で専門家としての貢献はあまりなかった。参加学生は「ことばの研究(演劇学、哲学、言語学)が地域振興にどう応用できるか」という問いを念頭におきつつ、田原未来プロジェクトの活動にゲスト企画者として協力し、当該イベントを作り上げた。質疑応答では、この点の説明に大きな時間を割いてしまった。地域住民、NPO、学生が共有していた関心と利害、あるいは地域のために共通の目標を設定した経緯などについてももう少し詳しく報告しておけば、より踏み込んだ議論ができたかも知れない。

「はじめての学会」OFF LABEL

2組目は、学問のアウトリーチを目指したイベント企画について説明した。2019年度入学の4人の学生、飯塚、高田、趙、南が設立したOFF LABELという団体によって企画されたもので、学問や研究の力を通じて、人々や組織、国や地域に貼られた、様々な負の「ラベル」を取り払ってゆくことを目的としている。アカデミズムと現実世界をつなげるために、カジュアルな形で学問の楽しさを広め、研究を社会に発信する活動を行っていきたいと考えており、その第一弾として2020年1月に開催されたのが「はじめての学会」だ。東京大学の教員から在野の研究者まで幅広い研究者をゲストに迎えることで、研究するということを根本から問い直したり、大学院の実態について議論したりし、100人を超える人が企画に参加した。今回の発表と質疑応答を通して、団体として認知度を高めながら継続的に活動していくためには、明確な問題設定と解決手法を持つことが重要であることに気づくことができた。

文化的背景を可視化する社会科教材の開発

3組目は、社会科教員の経験が豊かな大井が、異文化間で議論ができるプラットフォームづくりを目指す、自らの取り組みを説明した。国際化の進展に伴い、多文化共生についての理解を深めることが日本でも求められているが、学校教育でこうした認識を育むための具体的な手法については十分に検討されていない。それどころか、一つしかない答えを探ることが重視されるため、知的好奇心をくすぐられるような驚きの体験を得にくいのが現状だ。大井は、個々人の意見の背景に、

国や文化の歴史があることを可視化し、主体的に多様性について学習できるような教材開発に取り組んでいる。すでに100を超える国の人々から意見を集め、デジタルアースにマッピングしている。研究では、子どもたちの多面的な視座の育成にはどのような手法が有効か、また、日本の教育システムにはどのような問題があるかをテーマとしている。質疑応答では、異なる意見に出会うだけでなく、相手との対話の必要性を感じさせる問題設定や学習方法も重要なのではないかという指摘が投げかけられた。



グループ・ディスカッション

発表を踏まえ、後半は少人数のグループに分かれて議論の深化を図った。キーワードを参加者から募り、Empathy, School Education, Diversity, Local Community and its Voiceという4つのフレーズをテーマに、3-4人に分かれて活発に意見を交換した。トヨタ財団の助成を得てプロジェクトを実施した方々と時間をかけて対話することができ、IHSの活動で向き合う様々なコミュニティとの向き合い方に関して、多くの示唆を得た。

研究と実践の両立を目指すとき、両者の共通点と相違点を把握しておくことが重要になる。このセッションでは、相違点について大きな発見を得ることができた。企画段階におけるニーズの把握、取り組む際の立場の明確化、そしてそのニーズと立場に見合った成果の提示、このどれもがアカデミアの外で活動していくための重要なポイントになる。研究と実践の両立は、学生それぞれが自分にあったバランスを見つけながら継続していくだろうが、今回のセッションで得た学びを活かし、木と森とに交互に焦点を移し続ける際の留意点を踏まえながら活動を継続したい。ここで得られた知見は、今後IHSプログラムの学生たちが、より長期にわたるプロジェクトに取り組むうえで、有益なリソースになるだろう。



IHS所属学生の活動より

分野横断的な交流や、キャンパス外での研修を奨励する本プログラムでは、専門分野とはなんの関係もなさそうなところから思わぬ刺激を受けることが多々ある。例えば、戯曲分析を専門とする学生が精神福祉の現場での語り合いを見学したことで「演劇」の概念を根本から問い直しはじめたり、移住者の研究に携わる学生が山間部の神楽の継承を見学することで、生活共同体の内部を支える「伝統」のイメージの重要性に気づかされ、コミュニティの内と外について再考するきっかけを得たりする。一分野の論文ばかりを読んでいては得られない経験と知的刺激を、学生ひとりひとりが、自己のうちで対話させることになるのである。

個人単位に限らず、自主的な勉強会の単位でも、IHSプログラムでしか経験できない刺激がある。例えば、自然科学、社会科学、人文学の学生たちが共に読書会を開いたことで、論文と書籍の違いについて、基本的な事実気づいたことがあった。自然科学の研究者は、一般向けの本を執筆する際、論文には書くことのないような、社会へのメッセージを書き足すことがあるという。自然科学における書籍は、人文学や社会科学と大きく違い、厳密に専門性を問うよりもアウトリーチの意味が強いからだ。しかし、その場合でも科学者としての権威が付随することに自覚的になる必要があるのではないか、専門性を離れたところで私見を掲げてしまっていないか。実験科学に取り組む学生に、こうした反省が生まれた。

また、アイヌについての勉強会も行われてきた。アイヌ文化を知るなら言語から学ぶことが大切だと考え、アイヌ語を学び、アイヌ語でアイヌの物語を読むというものだった。参加した学生が本来の専門とする分野は、言語学、文学、写真論から地質学に及ぶ。アイヌというテーマのもとに10人もの学生が集まること自体珍しいことだが、アイヌを専門としていなくても、自分なりに接続できる大きな問いを、多様な分野の学生が持っていたからこそ、可能となる勉強会だった。



東京大学IHS所属学生の紹介

IHSには約50人の学生が所属している。ここでは今回のシンポジウムに向けて、事前勉強会や企画会議、そして当日の記録・発表に関わった11人を紹介する。

高田玲奈(タカダ・レナ):主専攻

総合文化研究科超域文化科学専攻表象文化論コース修士課程。8年の海外経験から海外での日本のイメージに疑問を持つ。日本文化の対外発信、とりわけかわいい文化がどのように発信され享受されているのかを政策やメディア論の観点から研究している。英語でkawaiiをテーマにした動画を2015年よりYouTube(Rena May Kawaii Japan)にて投稿。

趙 誼(チョウ・ギ):主専攻

総合文化研究科地域文化研究専攻。多文化共生・統合人間学プログラム修士課程。台湾生まれ台湾育ち。日本語⇄中国語(繁体字)通訳・翻訳歴5年。環境保護、エコ、デザイン、地方創生に関心があり、昨年7月にオランダへ短期留学(サーキュラーエコノミー)。研究者でありながら、起業を目指している。

飯塚陽美(イヅカ・ミナミ):主専攻

総合文化研究科 超域文化科学専攻文化人類学コース修士1年。高校時の南米チリへ単身留学をきっかけに、人の移動に関心を持つ。現在は沖縄県に在住する日系人を対象に、個人・ローカルなレベルでのアイデンティティ変容についての研究を進めている。日常のそぼくな疑問と人文学をつなぐ研究機関「ラボラトリ文鳥」の運営メンバー。

南 希宙(ナム・ヒジュ):副専攻

総合文化研究科超域文化科学専攻比較文学比較文化コース修士課程。韓国生まれ、日本歴16年。フランス(ストラスブール大学)留学経験あり。外国人として長年日本で暮らし、自分の中の価値観が揺らいだ経験から、比較文化の分野に興味を持つ。専門は韓国近現代美術研究。在日韓国人高校生の日本美術大受験に関する相談に乗ることも。

大井将生(オオイ・マサオ):副専攻

研究タイトルは「デジタルアーカイブの教育利用」。専門は情報学と教育学。AIやデジタルアーカイブを活用した多面的・多角的な視座を育むための歴史授業実践を行っている。また、学校教育における多文化共生認識の育成を支援するための議論基盤プラットフォームコンテンツの構築を目指してフィールドワークと情報デザイン、メディアアート作品を制作している。

高村夏生(タカムラ・ナツキ):副専攻

総合文化研究科広域科学専攻生命環境科学系所属。専門分野は生命科学。IHSでは、語られた他人や場所の経験を自分に織り込んで変化することと、自分の経験を他人に差し出すように語ることの2つを通じて、自分と他人・場所の出会いを相互作用可能なつながりに変えることを意識して活動している。

ピーピョミツ:主専攻

総合文化研究科地域文化研究専攻、IHSプログラムを主専攻とする修士2年生。ミャンマーのマンガレー出身で、在ミャンマー華人のライフストーリーを研究。民族とアイデンティティの複雑さを、家族に注目して考察している。各地の地域コミュニティとユニークな取り組みに関心を持ち、積極的に足を運んでいる。

長江侑紀(ナガエ・ユキ):副専攻

教育学研究科博士後期課程所属、教育社会学と比較教育学を専攻。移民の子どもとその教育について、フィールドワークを行いながら研究をしている。子ども、先生、親、女性、政策など、多角的に現場を捉えることを意識している。IHSでは、先住民族の問題に関する研修から、遺伝子検査の先進的技術の見学まで、幅広く取り組んできた。

田邊裕子(タナベ・ヒロコ):副専攻

総合文化研究科博士後期課程在籍。シェイクスピアの時代の演劇文化、特に物語空間の表現技法を研究。従来の演劇のイメージにとらわれない多様な取り組みについて実践的に考察し、異なる立場に関わりあうことをテーマに、イベントやプロジェクトを企画。2020年1月、町のシンクタンク「ラボラトリ文鳥」を設立。言葉に関わる探究活動が誰にとっても身近なものになることを目指している。

<https://laboratorybuncho.wixsite.com/mysite>

中川亮(ナカガワ・リョウ):副専攻

総合文化研究科博士後期課程。専門はフランス語史・フランス語学。研究テーマは、17-18世紀ロンドンのユグノー難民によるフランス語と英語の使用の分析と記述。IHSでは、外国語教育や地域振興にまつわる活動が多くを占める。特定の言語を使うことで生まれる自由と束縛の実態を理解するために言語研究がとるべき方法・立場を日々模索している。

宮田晃碩(ミヤタ・アキヒロ):副専攻

超域文化科学専攻(博士課程)所属。専門は哲学。M. ハイデガー、和辻哲郎、H. アーレント等の著作を中心に、「他人を理解するとはどういうことか」「言葉を理解するとはどういうことか」など、言語や他者理解の問題について研究している。また総合地球環境学研究所へのインターンシップを通じて超学際研究に取り組むほか、国語科教育にも関わり、哲学に何ができるのか、実践的に模索している。

おわりに

園田茂人

東京大学東洋文化研究所教授、トヨタ財団国際助成プログラム選考委員長

通常、研究への関心は社会と「繋がる」ことから始まる。どうして、こんな事象が生じているのか、なぜ、この現象を社会的に解決できないのか、どうすれば、事故は未然に防げるのか。人文系から自然科学まで、研究上の問いは社会との接点で生じ、これを起点に研究は形づくられる。

研究の過程でも、社会との「繋がり」はかろうじて維持される。先行研究の吟味、研究構想の発表と周囲からのフィードバックなど、周囲とのやり取りの中でテーマは深められ、研究の独自性が模索される。

ところが暫くたち、深められていく研究の成果をどのように社会に「戻す」か、どのように社会と「繋がる」とするかという段になると、若い研究者の多くは「そこまでは考えが及ばない」と答えるだろう。あるいは、こう回答する者も少なくないはずだ。「そもそも社会に貢献できるような研究をしているのか、まったく自信がない」。

研究環境が激変する中で、若手研究者、とりわけ人文社会系の研究者は孤立しがちだ。もともと社会と「繋がっていた」はずの研究が、研究を進める過程で社会との結びつきが「切れていく」とすれば、何とも不幸なことだ。博士課程の学生に心を病む者が多いが、これも社会と「切れた」ことが原因になる場合が少なくない。

独創性追求の過程で生じる他者との差別化・差異化、専門化の過程で生じる「話をするこゝろ」人の減少、期待された成果がなかなか得られないことによる自己肯定感の衰弱・消失。社会と「切れる」原因は複合的だが、研究者と社会との結びつきを「戻す」のに、様々な試みが必要であることは明らかだ。

2014年にIHSプログラムを立ち上げる際、私たちが最も重視したのは、この社会との結びつきを「戻す」ことだった。ここでいう社会には、同じ研究を志している仲間集団もさることながら、異なる研究に従事しながらも、潜在的に接点を持ちうる人々、研究成果を利用するかもしれない人々、国境を越えて似た関心をもつ人々など、様々な人たちが含まれている。

多様な人々と出会い、意見を交換することで、自分だから貢献できる研究上の特長を確認し、目に見えない成果を形にしていく強さを身につけてほしい。——IHSプログラムが、学生が身につけるべき4つの力の中に「協働力」を入れているのは、このような理由からである。

2019年度からトヨタ財団国際助成プログラムの選考委員長をさせていただいているが、幸運なことだと思う。採択プロジェクトの内容ばかりか、これを推進している人を直接知ることができるからだ。

彼らにご協力いただき、IHSプログラムの学生たちに刺激を与えてもらえないだろうか。財団の方からイベント企画について相談があった時、IHSとの共催を提案させてもらったのには、そうした裏事情がある。本報告書は、トヨタ財団とIHSの共催イベントの報告という体裁を取っているものの、私としては、IHS側がトヨタ財団の「人的資源」を利用させていただいたイベント報告だと思っている。

多くのプロジェクトは、スタート時点では、その成果が誰にも見えていない。目に見えないから、関連する人々を説得してプロジェクトに協力してもらうのが難しい。目に見えないから、プロジェクトを主導している者も、「これでいいのか」と自問する。私たちが運営しているIHSプログラムも、これとまったく同じ状況に置かれている。

時に八方ふさがりになりながらも、「どうにかなる」と前を向く力。目に見えないものを信じてもらうように、粘り強く作業する力。プロジェクトを進める上で重要なことは、若手研究者にとっても、IHSプログラムを運営する我々にとっても大切なことだ。

今回のイベントを通じて、私自身、目に見えない成果を得ようとプロジェクトを進めるには、圧倒的な人間力が必要であることを再確認したように思う。IHSプログラムの学生たちも、同じことを感じたに違いない。



The University of Tokyo



THE TOYOTA FOUNDATION

発行

 公益財団法人トヨタ財団

〒163-0437 東京都新宿区西新宿二丁目1番1号

新宿三井ビル37階 私書箱236号

公益財団法人トヨタ財団 国際助成プログラム

<https://www.toyotafound.or.jp>

発行年月：2020年4月

デザイン：柁山真之 (snug.)

